文部科学省事業
令和元年度 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

令和元年度指定
WWL コンソーシアム構築支援事業
研究報告書

第１年次

令和２年３月

国立大学法人金沢大学
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校

目　　次

第１章　令和元年度 WWL コンソーシアム構築支援事業研究完了報告書・・・・・・・・・２

第２章　令和元年度 WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校・連携校における取組・・・９

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校における取組・・・・・・・・９

石川県立金沢泉丘高等学校における取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

石川県立金沢二水高等学校における取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

石川県立小松高等学校における取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３

石川県立七尾高等学校における取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

富山県立高岡高等学校における取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６

福井県立高志高等学校における取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７

第１章　令和元年度 WWL コンソーシアム構築支援事業研究完了報告書

（別紙様式３）

年　　月　　日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　石川県金沢市角間町ヌ７番地
管理機関名　国立大学法人金沢大学
代表者名　　学長　山　崎　光　悦　　印

令和元年度WWＬ（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
令和元年 5 月 16 日（契約締結日）～令和 2 年 3 月 31 日

２　事業拠点校名
学校名　　金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校
学校長名　山本　吉次

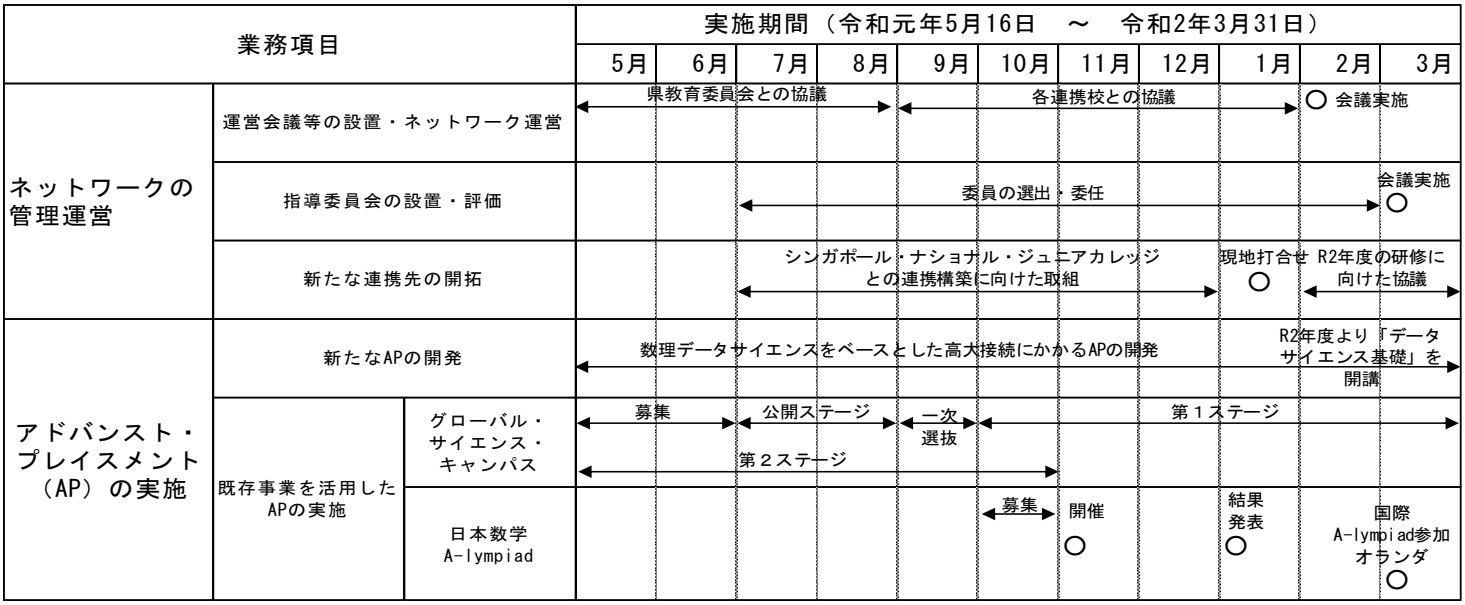
３　構想名　持続可能な世界を実現し，Society5.0 を牽引するグローバル・リーダーの育成

４　構想の概要
本構想は，石川県・富山県・福井県の３県にまたがる北陸圏域の高等学校，海外の高等学校，関連する機関により「北陸 AL ネットワーク」を形成し，組織的・継続的に”持続可能な世界を実現し，Society5.0 を牽引するグローバル・リーダー”を育成するものである。拠点校において実施してきたグローバルハイスクール事業の課題探究型課程編成をベースに，国内外の連携校の多様な視点を取り入れた学習と新たな科目の開講，先進的技術を有する連携機関による，専門的視点からの指導等を取り入れることにより，その教育カリキュラムを一層深化させる。さらに，高校生の段階から金沢大学が有する海外ネットワーク等も活用した国際性と，アドバンスト・プレイスメントによる高度な知識を身に付けさせる取り組みを加え，社会が抱える複雑な課題に立ち向かう”新たなグローバル・リーダー”育成モデルを確立し，広く全国へと発信する。

５　教育課程の特例の活用の有無
無し

６　管理機関の取組・支援実績

（１）実施日程



（２）実績の説明

２０１９年度の構想計画に係る取組の実績

（２）－①　ネットワークの管理運営

本事業の実施にあたり，令和元年度は，事業期間のみならず，事業終了以降の自走期間においても，強固な連携を維持するため，ネットワーク基盤の整備を重点的に展開した。具体的には各県教育委員会や連携校との事前協議を重ね，本事業に対する再度の協力依頼を行うとともに，今後の事業展開に向けた Web 会議システムの運用を行うことで，管理機関，拠点校，連携校間での迅速な情報共有体制を構築した。これらの基盤整備を行ったうえで，令和２年２月に「北陸 AL ネットワーク運営会議」を開催するに至った。開催した本運営会議においては，令和元年度の事業全体に関する総括や，令和２年度事業計画の検討等を行い，これまでの事業の進捗管理や次年度の事業運営の在り方について確認した。

また，運営指導委員会では，本事業における学びの在り方等について，報告書に基づき，専門的見地から検討し，指導・助言をいただいた。

金沢大学グローバル人材育成推進機構に設置した「海外交流アドバイザー」を中心に，海外の高等学校と拠点校との連携強化を進め，令和元年度においては，シンガポールを対象に基盤作りを進めた。計画当初に予定していたシンガポール経営学院インターナショナルアカデミーとは先方の解体により連携することができなくなったが，新たにシンガポール・ナショナル・ジュニアカレッジ（以下 NJC）との連携体制の構築に至り，１月には管理機関の職員・拠点校の教員と NJC 副校長とシンガポールにおいて，今後の事業展開について打合せを行った。NJC とは Skype 等を活用したディスカッションや現地での実地調査を行う予定であるが，さらに先方からシンガポールでのホームステイを含めた積極的な連携の提案を受ける等，連携の強化が進んでいる。

（２）－②　アドバンストプレイスメント（AP）の実施

管理機関である金沢大学における AP として，「日本数学 A-lympiad」や「グローバルサイエンスキャンパス」（以下 GSC）を実施しており，令和元年度「日本数学 A-lympiad」では拠点校から５５名，連携校から５６名が参加し，全体では，１３県から６７チーム，２５４名が参加している。令和元年度は拠点校の参加チームが優秀な成績を収め，オランダで開催される「Math A-lympiad」に参加する予定であったが，新型コロナウイルスの影響により中止となった。

「GSC」では７，８月に開催される公開ステージに約１００名が参加した。拠点校から９名，連携校から４２名が参加しているほか，北陸圏のみならず，神奈川県や岐阜県，長野県等の高校生も参加している。

これらの活動を通して，学生は自己の教養を高め，思考力と判断力を養成している。
さらに，これらの取組に加え，管理機関である金沢大学において，高大接続科目としての展開を見据えた科目として，「データサイエンス基礎」を開発した。令和２年度に大学での科目として先行導入し，高校生の先取り履修の環境整備を進めている。

課題項目別実施期間の業務項目に係る上記以外の取組の実績

・ネットワークの管理運営

○　運営会議の設置・ネットワーク運営

運営会議及びネットワーク運営については，（２）－①で述べたように「北陸 AL ネットワーク運営会議」が中心となって取組を推進している。さらに，「北陸 AL ネットワーク運営会議」の下，拠点校・連携校のカリキュラム担当教員を中心とした「事業連携委員会」設置し，３月に Web 会議にて，本事業の展開等に係る課題・取組等の情報を共有するとともに，令和元年度の取組を踏まえた課題等に対する具体的な方策の検討を行った。

○　新たな連携先の開拓

NJC との新たな連携体制を構築したが，これに加え，関西の WWL コンソーシアム構築支援事業拠点である関西学院大学との連携や，これまで拠点校である附属高等学校，金沢泉丘高等学校，金沢二水高等学校の３校で行っていた合同課題研究発表会に，新たに金沢西高等学校が加わり，４校合同の課題研究発表会に拡大して開催した。さらに，連携校である高志高等学校では，関東の WWL 拠点校である筑波大学附属坂戸高等学校に訪問研修を行っている。
また，新たな連携先の開拓を目指し，本事業における管理機関，拠点校の取組を明示したパンフレット（日本語版，英語版）を作成し，取組の広報活動の一助としたほか，附属高等学校長による金沢大学公開市民講座を行い，本事業に係る取組の紹介を行った。

管理機関の支援

・人的支援

人的支援として，管理機関が大学であることの強みを活かし，拠点校，連携校への留学生の派遣を行った。ポスター形式やワークショップ形式でのプレゼンテーションやディスカッションを英語で行うことにより，実践的な英語力の養成を図ることが可能となった。
また，連携校である高岡高等学校へ SDGs に造詣の深い教員を派遣し，講義をすることで，SDGs を題材とした取組の展開を推進したほか，小松高等学校では「こまつ研究サポートプログラム」に数物化学系等の教員を派遣し，指導・助言を行った。

・財政的支援

管理機関である金沢大学の自主財源等により，AP として日本数学 A-lympiad や GSC を実施した。また，拠点校において，本事業の永続的な実施に向け，グローバル・リーダー育成基金を創設した。
なお，連携校に対しては，東京で実施された全国高校生フォーラムへの参加にあたり，旅費等の財政的支援を行った。

7　研究開発の実績

（1）実施日程

業務項目		実施期間（令和元年5月16日　～　令和2年3月31日）										
		5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
グローバルな社会課題カリキュラム開発	SDGsを題材とした教科指導 地域課題研究・グローバル課題研究の展開			○ 中間報告会	地域課題研究		シンガポールでの発表	４校合同発表会		企業向けポスターセッション ○	○ レポート提出	
	新たな科目の開発・実施			「国際教養 基礎」の立案		実施						
海外研修/アジア高校生架け橋プロジェクトにおける海外高校生受入	海外研修								シンガポール現地学習 ○			
	架け橋プロジェクト受入					留学生受け入れ（タイより）						
高校生国際会議の開催	留学生とのグローバル・ディスカッション							グローバル・ディスカッションの実施 ○	○			
	国際会議開催に向けた準備				北信越探究フォーラム開催準備							

（2）実績の説明

２０１９年度の構想計画に係る取組の実績

（2）－①　グローバルな社会課題研究のカリキュラム

管理機関に配置したカリキュラムアドバイザーと拠点校教員が協働し，地域課題研究に係るフィールドワークプログラム等の開発を行った。

拠点校における新たな科目開発については，１年次から国際的な素養を育て，有効な海外交流に繋げるための新たな教科である「国際教養基礎」を３年計画で導入することとしていたところであるが，計画を前倒しし，令和元年度に導入・実践するに至っている。本科目では，WWL 事業で目指すグローバル人材に求められる探究的スキルを獲得するためには「理論」と「実践」の往還が必要であるとの立場に立ち，１年次における「理論」の獲得として，「フィールドワークスキル」や「クリティカルシンキング」，「リサーチスキル」等の授業を展開した。今後は本科目で培った資質・能力を各教科科目や校外活動等において「実践」することで探究的スキルの獲得を目指す。

地域課題研究では，「地域活性化プロジェクト」として①地域の課題を自分たちで発見し（課題発見），②実社会で生きる方々を巻き込んで（協働），③高校生らしい発想で解決策を提案・実践する（独創・実践）課題解決学習に取組み，グローバル社会と繋がる地域社会について，主体的に認識を深めた。「地域活性化プロジェクト」において SDGs の課題の１つであるエコロジーをテーマとした「地産地消アイス」の製作・販売や「平和町プロジェクト」として「エコショップマップ」の製作を行った。同様に「地域活性化プロジェクト」の１つとして竪町を対象とした取組を企画し，地域との協議において，高校生らしい独創的な観点を持ちながら，地域のニーズに即した説得力のある提案を行うことで，金沢２１世紀美術館や竪町商店街との協力体制の構築に至った。これらの協力体制の下，竪町での高校生主催による「かなざわ未来芸術祭」の実施に向けた具体的な検討を行った。

これらの活動において作成したポスターを企業向けポスターセッションにおいて発表し，優秀チームは第１回 WWL 研究大会において発表を行った。

（2）－②　海外研修/アジア高校生架け橋プロジェクト

令和元年度は，アジア高校生架け橋プロジェクトにおいて，タイからの留学生を受け入れ，拠

点校においてともに学ばせることで，異なる地域，文化におけるそれぞれの差異に触れる機会を提供した。また，留学生を高校生フォーラム等に参加させ，国内での多様な経験を積ませる活動を展開した。

（２）－③　高校生国際会議について

これまで連携校等とSkype等を用いて研究交流を深めてきたことに加え，令和元年度新たにNJCと連携を構築したことを受け，拠点校を中心に国内外の高校生が参加する課題研究や研究成果の発表の場としての国際会議を当初計画より前倒しし，令和２年度に開催することとした。

また，拠点校や連携校，さらに長野県や新潟県の高等学校も参加する北信越探究フォーラムを開催することで，令和元年度の各学校における取組の集大成を発表する場にするのみならず，次年度以降の国際会議に向けた課題発見の場とする予定であったが，新型コロナウイルスの影響により開催を見合わせた。

課題項目別実施期間の項目に係る上記以外の取組の実績

・グローバルな社会課題研究のカリキュラム開発

①　SDGsを題材とした教科指導　地域課題研究・グローバル課題研究の展開

令和元年度はSGHで行ってきた取組をベースとし，WWLの要素を取り入れた科目を試行的に行っており，２年生の「総合的な学習の時間」において，SDGsを題材とした個人研究を行い，英語でポスターの作成を行った。作成したポスターを用い，管理機関から派遣された留学生に向けてプレゼンを行い，英語表記や研究内容のまとめ方についてブラッシュアップを行った。さらに，優秀なポスター発表については，第１回WWL研究大会において発表を行った。

また協働機関と協力し，ACCU（アジアユネスコ文化センター）による，SDGs課題研究の生徒向け研修会や教員向け研修会を実施した。

・高校生国際会議の開催

①　留学生とのグローバル・ディスカッション

SGH事業から継続して，管理機関から連携校である金沢泉丘高等学校へ留学生の派遣を行っており，英語を活用したワークショップ形式の活動を行うことで，実践的な英語力の養成を図った。

また，金沢二水高等学校におけるグローバルゼミにおいても，同様に留学生を派遣しており，課題探究で取り組むテーマについて意見交換をしながら，交流と考察を深める機会を持ったことにより，学生の視野が広がり，テーマに対して複眼的な見方の醸成を図った。

８　目標の進捗状況，成果，評価

・管理機関における進捗状況・成果

本事業で形成を目指す「北陸ALネットワーク」は石川県・富山県・福井県の３県にまたがる北陸圏域の高等学校，海外の高等学校，管理機関により形成される。県をまたぐ広域な連携を国立大学が管理機関として行っているのは，全国で１拠点である。このため，各連携校とのネットワーク等の構築を初年度の事業展開における最も重要なものと位置づけ，取組を展開した。各県の教育委員会や連携校等と事前協議を行い，連携への協力を改めて得た上で，「北陸ALネットワーク運営会議」の開催に至っている。

ネットワーク形成に関し，新たに金沢西高等学校の４校合同課題研究発表会への参画により，北陸圏域でのネットワークの拡大・強化が進んでいる。さらに，関西のWWL拠点である関西学院大学とのWWL・SGH×探究甲子園の共催に至っており，各地域にあるWWL拠点同士の連携体制の構築にもつながっている。

また，高大接続にかかるAPについて，すでに記載のとおり，これまで管理機関で実施している事業を引き続き行っていくとともに，「データサイエンス基礎」を大学の授業科目として，令和２年度に先行的に開講することにより，高校生の先取り履修環境の整備を進めている。これらのことから，令和元年度事業実施計画書をベースに，遅滞なく進捗している。

・拠点校における進捗状況・成果

拠点校においては，管理機関に配置したカリキュラムアドバイザーを主導的立場に立て，１年次から３年次に通貫したカリキュラム開発を目指し，特に令和元年度は１年次におけるカリキュ

ラム開発を中心に行ってきた。
新たな科目開発として「国際教養基礎」を３年計画で導入することとしていたところであるが，計画を前倒しし，令和元年度に導入・実践するに至っている。
また，「地域課題研究」において「平和町プロジェクト」として地域の課題を発見し，地域と協働した上で，解決策の提案・実施する等，（２）－③に記載したとおり具体的な活動に至っているほか，並行して，金沢２１世紀美術館や堅町商店街を巻き込んだ「堅町プロジェクト」が進行中である。
加えて，NJC との新たな連携構築により，高校生国際会議を当初計画より前倒しして開催することとした。これらのことから，拠点校における進捗は計画を大幅に超えて進捗しているといえる。
また，これまで記載のとおり，「国際教養基礎」や「地域課題研究」における「平和町プロジェクト」，「堅町プロジェクト」の検討等，目に見える成果を挙げているが，特に「地域課題研究」では，これまで加賀や能登の地域を対象としていた活動を，近隣の地域を対象とした上，授業時間中のフィールドワークを可能にしたことにより，校外での活動の機会が飛躍的に増え，活動の質的向上につながるとともに，課題発見，地域との協働，課題解決策の提案を身近な地域で行うことにより，高校生らしい独創的な観点を持ちながら，地域のニーズに即した説得力のある提案が可能となった。

・連携校における進捗状況・成果
各連携校における WWL 事業にかかる先導的なカリキュラムの開発に向けて連携体制の強化を行っている。例えば金沢泉丘高等学校においては管理機関からの留学生派遣を行うことで，連携体制を強化した。また，金沢二水高等学校，金沢西高等学校を含めた４校合同課題研究発表会を行うことで，学校を超えた学びの交流が促進された。このほかに高岡高等学校では SDGs のうち，海洋環境問題について課題研究への取組が始まり，調査結果を富山県内の他校との交流会で発表している。高岡高等学校での取組には，管理機関から SDGs に造詣の深い教員を派遣しており，取組を深化させる一助となっている。

・評価について
令和元年度の WWL 事業の達成状況に対する評価は本報告書を用い，運営指導委員会の指導を受けた。また，拠点校における「地域課題研究」では高校生の研究成果を，協働機関である北陸財務局や日本政策金融公庫に依頼して評価をした。

９　次年度以降の課題及び改善点
・管理機関における課題及び改善点
令和元年度は，新型コロナウイルスの影響により，北信越探究フォーラムの開催が中止となり，学生の発表の機会が少なくなったことは課題であり，令和２年度はこれを踏まえ，学生の発表機会のさらなる充実を目指す。また同様に関西学院大学と共催予定であった WWL・SGH×甲子園も中止となったが，次年度以降も連携体制を維持していくこととする。

・拠点校における課題及び改善点
「国際教養基礎」では，学生に必要なスキル，コンピテンシー，マインドセットを見極め，必要に応じて開講してきたが，そのためにややもすると一貫性に欠けるようにも見えるカリキュラムとなってしまった。令和２年度においては，より系統立てて授業を行うとともに，教員による実践的/先進的取組や社会人との協働授業を取り入れたカリキュラム開発を行うこととする。
「地域課題研究」では，本事業以前から培ってきた研究方法を用い探究活動を行うことで，これまで述べてきたように，明確な成果を挙げている。令和２年度以降においてもこれまでと同様に探究活動を行っていくほか，さらなる発展を目指し，課題の発見・設定時点での外部からの助言やプログラムの継続的・中長期的な実施に向け，教員間での次年度担当への引継ぎ等，情報共有体制の強化を行う。
【担当者】

担当課	グローバル人材育成推進機構・教育政策室	ＴＥＬ	076-264-5020
氏　名	亀田　潤	ＦＡＸ	076-234-4010
職　名	室員	E-mail	o-ghrd@adm.kanazawa-u.ac.jp

第２章　令和元年度 WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校・連携校における取組

●金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取り組みについて

１．2019 年度　地域課題研究（地域活性化プロジェクト）

(1)「地域課題研究」のカリキュラム開発

目的とねらい

地域活性化プロジェクトのテーマは，「身近な地域やそこに暮らす人びとを幸せにする方法を提案・実践しよう！」である。このプロジェクトを通じ，生徒は①地域の課題を自分たちで発見し（課題発見），②実社会で生きる方々を巻き込んで（協働），③高校生らしい発想で解決策を提案・実践する（独創・実践）課題解決学習に取り組み，グローバル社会とつながる地域社会について，主体的に認識を深めることが期待されている。

本プロジェクトは，学校からおおむね２時間で往復できるエリア（主に，金沢市内）を対象に，フィールドワーク等の手法を駆使して，各チームが課題の設定からその解決策の提案・実践まで行うことを目標に進めてきた。このようなプログラムを設定した理由は次の通りである。

人間が生活する地域にはそれぞれ，固有の歴史や文化，資源，人材，資本があり，どの地域も人々が豊かに暮らすことができる条件や可能性を備えているが，それを実現するためには多くの課題を克服しなければならない。地域の主人公は，言うまでもなくそこに暮らす住民であるが，住民を中心に，地域に責任を持つ自治体，地域で活動する団体・グループ，地域の関心を持つ個人など様々な力が集まってこそ，地域は躍動し，創造性を高めていくことができる。本プロジェクトを通じ具体的な解決策を考察する中で，様々な人間や自然の営みを肌で感じることは，人材育成の観点からも欠かせない学習活動であろう。地域活性化のために，地域が抱える問題を明らかにし，地域の魅力と新たな発展の芽を見出す作業は欠かせない。地球上のすべての人びとは，必ずどこかの地域で暮らし，働き，人生のすべての時間を地域とともに送っている。従って，この地域に寄り添った学習活動は，日本を超えて世界に通ずる普遍性につながってゆくことが期待される。この授業の真のねらいはここにある。

SGH からの改善ポイント

令和元年度の改善点は大きく３つある。１つは，授業時間中のフィールドワークを可能にしたことである。これにより校外での活動の機会と質が飛躍的拡大・向上した。本校では長らく，１年生の「総合的な学習の時間」を「地域課題研究」と題して，石川県のいずれかの地域を舞台に，課題解決策を提言する活動を進めてきた。高校生の柔軟な発想はイノベーションの種となることが少なくなく，これまでにも何度か自治体や企業にアイディアを採用してもらっている。しかし，実社会を題材とする割には校内での活動がほとんどで，生徒の議論も「イメージ」にもとづくものが多く，必ずしも実態に即した議論になっていなかった。背景には，生徒が研究の対象地域とする加賀市周辺や能登半島が学校から遠く，実際に足を運んで調査したり，提案を実践したりする機会を学校として保障しづらかったことがある。そこで令和元年度は，活動エリアを縮小する代わりに，校外での活動を全面的に認め，プログラムの質的向上を図った。

２つは，このフィールドワークの実施と絡むが，学校が立地する金沢市平和町を対象地域とする「平和町プロジェクト」の創設である。このプロジェクトは，平和町大通り商店街振興組合の全面的な協力のもと，金沢市環境政策課ほか外部機関を巻き込んだ産学官連携事業として，令和元年度実験的に取り組んだものである。まちのイベントである夏祭りを高校生がまちと協働で開催したり，金沢市の事業「エコショップマップ」の企画・デザインを高校生が請け負ったり，あるいは平和町に新規のイベントを導入したりと，これまでにはない極めて実践的なプロジェクトとなった。

そして３つに，平和町プロジェクトをはじめ各実践を可能にしたものとして，令和元年度本校のカリキュラム・アドバイザーに就任した前田健志氏の存在が挙げられる。昨年度の本冊子には，今後の課題として「外部との連携強化は，担当教員の負担増にもつながる。コーディ

ネーターに専念できるような人がいないと，安易に強化を選択することもできない。もっと地域の方々に学校教育に入ってきていただきコーディネートをお願いするなど，地域で学校教育を行っていく風土を作る必要がある」と指摘したが，外部とのパイプ役を前田氏に引き受けてもらった（なお前田氏は，昨年度まで本校の教員として，地域課題研究を構築してきた中心メンバーである）。校内の調整を教員が，校外との折衝を前田氏が，という「分担」をつくることで，各々が取り組むべきエリアが明確になり，プロジェクトの円滑な進行が可能となった。

(2) 実施計画と評価計画

７３回生 地域活性化プロジェクト！（総合的な探究の時間×国際教養基礎）

年間スケジュール（変更の可能性あり）

月	日	５限	６限
4	１２	オリエンテーション	平和町を探検しよう！
	１９	平和町探検・成果報告会（ラウンドテーブル）	
	２６	園運動会をデザインしよう！〔授業参観〕	[redacted]
5	１０	園地域再生に関する講演（金沢大学・佐無田光先生）	
	１７	プロジェクトチーム（PT）立ち上げ！	
	２４	園NASA ゲーム・チーム力向上研修	
6	7	調査・実践日①（フィールドワーク＝FW 不可），PT 会議	
	１４	調査・実践日②（FW 可），PT 会議	
	２１	調査・実践日③（FW 可），PT 会議	
	２８	進捗状況整理会	
7	１０	園フィールドワーク研修	
		現地学習計画立案	
	１９	調査・実践日④（１・２限 FW 可），PT 会議	
	２６	調査・実践日⑤（現地学習１日目，FW 必）	
8	夏休	＊＊＊PT 別活動期＊＊＊	
	夏補	PT 会議（中間報告準備，FW 不可）	
	２９	第２回中間報告会～コメンテーターは７２回生！	
9	6	調査・実践日⑥（FW 可），PT 会議	
	１３	調査・実践日⑦（FW 可），PT 会議	
	２０	園プレゼンテーションスキル研修	
	２７	企画・報告書およびポスター作成①	
１０	１１	企画・報告書およびポスター作成②	
１１	1	報告会①〔授業参観〕	
	１５	報告会②	
	２２	報告会③	
1	１１	４校合同課題研究発表会（金大附属・金沢泉丘・金沢二水・金沢西）	
2	２１	企業向けポスターセッション	

なお，評価にあたっては，下記審査用紙を用いて外部審査員に評価を依頼した。令和元年度は成果物の評価は全面的に外部に委託し，教員はプロセスを評価するというすみ分けを行った。

地域活性化プロジェクト 審査用紙　　2019 年 11 月 15 日

審査員　　（ご所属）

組　　班

観点別評価 ※レベルCに該当しない場合「D」と表記

評価の観点	レベルC	レベルB	レベルA	評価
課題発見力	地域の特色や課題を調査し、それらの内容を踏まえて課題を設定している。	地域の特色や課題及び振興策の先行事例を調査し、それらの内容を踏まえて課題を設定している。	地域の特色や課題及び振興策の先行事例を十分に調査・理解し、それらの内容を踏まえて課題を設定している。さらにその課題の着眼点が斬新である。	
評価の観点	レベルC	レベルB	レベルA	評価
課題解決力（**一番重要**）	「課題内容」から「提案」へと論理的に展開されている。	「課題内容」から「提案」へと論理的に展開されており、提案の根拠も明確で、非常に説得力があり、現実的である。	「課題内容」から「提案」へと論理的に展開されており、提案の根拠も明確で、非常に説得力があり、現実的である。さらにその提案が斬新なものであり、実社会に発信できる提案となっている。	
評価の観点	レベルC	レベルB	レベルA	評価
表現力	声の大きさや話すスピードが適切である。	声の大きさや話すスピードが適切で、話の展開もわかりやすく、発表内容がオーディエンスに非常によく伝わった。	声の大きさや話すスピードが適切で、話の展開もわかりやすく、発表内容がオーディエンスに非常によく伝わった。また、発表をサポートする効果的な工夫が見られた。	
コメント（特に優れていた点およびそう感じた理由，さらに検討を要する点など）				

(3) 今後の課題

大きな課題は２つある。１つは，令和元年度，現場から課題を見つけてくるという方針のもと，積極的にフィールドワークを促してきたが，現場に行くことはそれだけでは適切な課題設定を保障しないということである。本プロジェクトでは令和元年度も，財務省北陸財務局や日本政策金融公庫，金沢青年会議所ほか，数多くの外部機関の協力をいただいている（主に発表会の審査員やアドバイザーとして）。しかし，プロジェクトの冒頭，つまり課題発見や課題設定の時期にこそ，外部の方に入ってもらって，テーマの妥当性についてもっと指摘をもらうなど，課題発見・設定を充実させていくことが，プロジェクトの発展には欠かせない。

いま一つは，プロジェクトの持続性についてである。社会人との協働は生徒や我々教員にとっても魅力的で，学び多きプログラムを可能にしてくれる。しかし，学校のカリキュラムは１年単位で編成されがちで，学校側の事情によっては，プロジェクトの中止（別プログラムの開始）という事態も懸念される。学校の外で本物の体験をさせていくためには，そうしたプログラムに中長期的に取り組んでいける学校として体制づくりが欠かせない。次年度の担当者への引継ぎや連携を密にし，次年度さらなるプログラムの発展を目指す。

＊令和元年度のテーマ一覧

A1　空き家に飽き飽きや!!～地域革命～
A2　平和町プロジェクト
A3　大麦ストロー
A4　金沢マラソン追っかけ応援プロジェクト
A5　灯台下暗し!?金沢市中央卸売市場 PR 作戦
A6　金沢を自転車にも，便利な街へ
A7　用水の魅力を伝えよう
A8　外国人観光客向けに観光マップを作る
B1　To Make Ishikawa Diverse ～繋ごう，BATON～
B2　Art Spiral～アートの渦～
B3　のと鉄道改革
B4　附属高校の充実ランチ計画
B5　Roadmap to history of Kanazawa
B6　平和町プロジェクト
B7　平和町プロジェクト
B8　我が市の和菓子
C1　平和町プロジェクト
C2　金沢の自然の魅力を伝えよう
C3　トイレにいっといれ！
C4　金沢の良さを伝える動画
C5　ハピリバ～HAPPY RIVERBED～
C6　III プロジェクト～アイスを愛する私たちの石川まるごとアイス～
C7　寺町を幸せにする～住民間コミュニティの創生～
C8　学校情報改革

２．2019 年度　グローバル課題研究

（1）模擬国際会議からゼミ課題研究への移行

今まで本校の２年次の総合では，模擬国際会議を行ってきた。「食糧安全保障会議　2050 年に餓死者をゼロにする」という題材で，生徒２～３人のグループがそれぞれの担当国を持ち，飢餓者ゼロに向けての合意形成を目指すというものであった。それらをきっかけに実社会の交渉の様子や，時事問題に関心を持つようになったと感じる生徒が多かったが様々な課題もあった。その中で，一番大きかったのは，生徒間のモチベーションの違いならびに教員間でのモチベーションの格差であった。そういった中で，生徒それぞれが行いたいことを行う，教員がより専門性を活かせる，という形へシフトすることが求められた。

（2）目的・ねらい

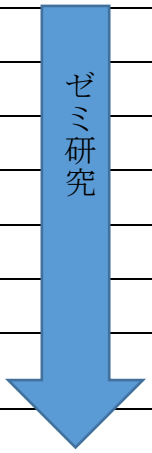
１．を踏まえ，令和元年度（昨年度１月より）初めて，「ゼミ形式」による「グローバル課題研究」を行った。「ゼミ形式」では，生徒が自ら選んだ課題に対して，個人研究を行い，また職員とともに協議を繰り返し，職員全員の持ちうる能力をそれぞれ最大限発揮することをねらった。

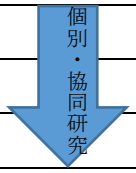
方法としては，「地域課題研究」と同様の手法ではあるが，”Think globally”の精神で，SDGs を根幹に置き，生徒それぞれが自分の関心に沿って題材をまず選んだ。その際に，現地学習で訪問予定のシンガポールやマレーシアの現状にどう活かせるかという観点にも留意させた。その後，生徒それぞれのテーマにマッチングするように，また，教員自らが専門分野や得意分野を活かせるように，教員が自由裁量で，ゼミを決定した。基本はゼミ活動で行うが，定期的に情報交換（中間報告会）を実施した，外部機関では，本校との連携協定を結んでいる ACCU（アジアユネスコ文化センター）に SDGs 課題研究の生徒向け研修会や教員向け研修会を実施していただいた。

「地域課題研究」の際には，自分たちの地元にのみ目を向けていたが，同じような問題を持っている「地域」が世界中にあること，また同じような問題でもそこにおける原因等にはその地域特有の原因があることを，「グローバル課題研究」を通して生徒には気づいてもらいたい。

（3）令和元年度実際に行ったスケジュール

12 月	グローバル課題研究オリエンテーション ACCU による SDGs 研修会（生徒）
1 月～２月中旬	SDGs の調査・個人テーマの選定
２月中旬～	ゼミの決定，ゼミ活動スタート
3 月中旬	グローバル課題研究中間報告会①
４月中旬	春休み中の研究・調査発表会（ゼミ内）
５月末	グローバル課題研究中間報告会②
７月中旬	グローバル課題研究中間報告会③
７月下旬	グローバル課題研究個別面談 by ACCU
８月下旬	個人面談の内容ならびに夏休み中の研究・調査ミニ発表会 ACCU による研修会（教員）
９月中旬	グローバル課題研究中間報告会④
９月下旬～	個別・協同研究スタート
１０月中旬	合同授業「世界を正しく理解するためには…」
１１月下旬～	英語版ポスター作成スタート
１２月中旬	ゼミ担当者への最終報告会 金大留学生への英語プレゼンテーション①
１月上旬	金大留学生への英語プレゼンテーション②
１月中旬	シンガポール現地学習　KAPLAN 校との交流
２月末	レポート〆切





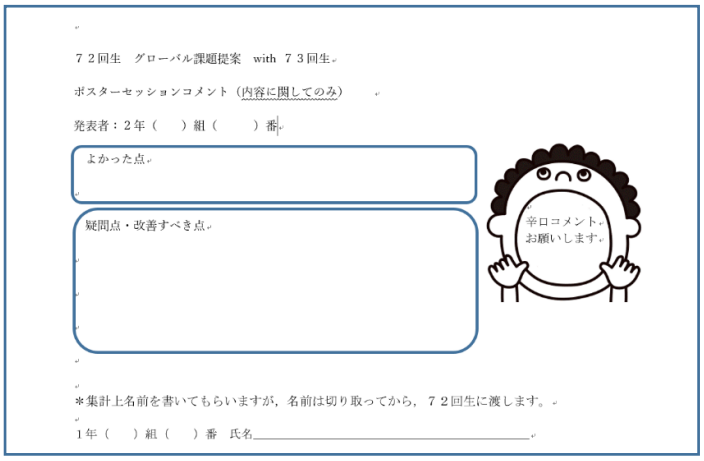
（4）中間報告会

「教員がより専門分野・得意分野を活かすことができる」というのがゼミ形式に移行した理由の一つではあったが，他ゼミとの兼ね合いや進み具合，また一人よがりにならないように，等考慮すべき点は多々あったため，中間報告会はまめに行ってきた。また，それぞれの報告会は，研究の進み具合に応じて，適切な負荷がかかるように内容を毎回変えて行った。

中間報告会①　ゼミ内での報告：自分のテーマを先行事例を挙げながら，ゼミ担当者ならびに他のゼミ生への報告
中間報告会②　ラウンドテーブル：他ゼミ教員ならびに生徒への報告
中間報告会③　１年生へのプレゼンテーション（日本語でポスターを作成）
中間報告会④　教育実習生へのプレゼンテーション（③で用いたポスターの活用可）

上記の中で，特によかったと思われるのが，１年生へのプレゼンテーションである。先輩として格好悪いところは見せられない！という思いがどれぐらいあったかは分からないが，同学年の他のゼミ生に話す時とは格段に違う緊張感があった。それは，後輩へのプレゼンということもあるだろうが，自分たちが行ってきたことを全く知らない人へどう伝えたら伝わるか，ということを第一に考えるように伝えてあったからではないかと思う。１年生からも質疑応答の時間に大変するどい質問が飛び交った。１年生にとっても，来年何を行うかを垣間見ることができ，双方にとってとても有意義な時間となった。

また，実習生や留学生へのプレゼンテーションを行えたことも，生徒にとって大変プラスになった。ゼミ担当者以外からの，また高校生には出せない視点で話を聞いてもらえ，彼らからもらったアドバイスによって，研究が前進したり，発表についてより深く考えた生徒も少なくなかった。



７２回生　グローバル課題提案　with ７３回生

ポスターセッションコメント（内容に関してのみ）

発表者：２年（　）組（　　）番

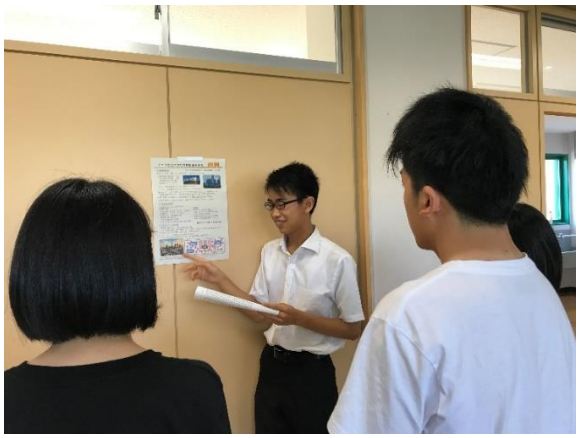
よかった点

疑問点・改善すべき点

辛口コメント、お願いします。

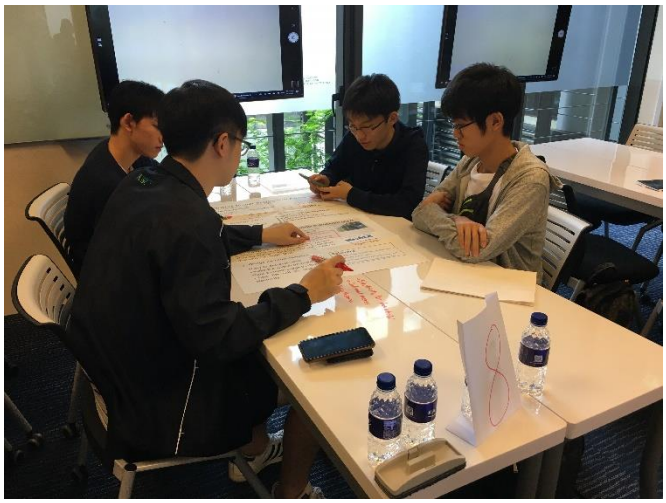
＊集計上名前を書いてもらいますが，名前は切り取ってから，７２回生に渡します。

１年（　）組（　）番　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿



中間発表③（上：１年生用ハンドアウト，右上：実際の写真）

留学生への英語プレゼンテーション



シンガポール KAPLAN 校との交流

（5）今後の課題

生徒は，最終的に，英語ポスター１ページを含む４ページの研究レポートを作成する。これは令和元年度全員が達成できそうであるが，令和元年度初めてゼミ形式ならびに個別課題研究を行ってみて多くの課題が出てきた。大きなものとして以下のものが挙げられる。

Ⅰ　研究内容における外部との交流・連携

Ⅱ　シンガポール現地校との交流・連携

Ⅰにおいては，生徒が研究内容における外部へのコンタクトを少なくとも一か所とることとしていたが，学校のサポート体制の不足により，コンタクトをとった生徒が少なかった。次年度においては，各教員間での情報共有等による生徒へのサポート体制の強化により，生徒が外部にコンタクトをとりやすい環境整備を行う。

Ⅱにおいては，当初予定していた学校が解体するという不運にも見舞われ，別の協力校探しに時間がかかったことや，日本と学期が違うため，考査等の時期がずれていたりしたことにより，シンガポールの高校との交流がメールでの連絡と現地での交流を１度行ったのみとなった。次年度については，管理機関を交えた連絡体制の強化により，共同研究体制を築いていく。

② 先導的なカリキュラム開発について

３．国際教養 基礎

(1) 目的・ねらい

学校設定科目「国際教養 基礎」の目的は，グローバル人材の素地を築くことである。

WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校の申請にあたり，SGH 事業で培った取り組みをどう活用し，発展させるべきかが課題となった。全国的な課題である世代交代の波に，本校も多分に漏れず直面している。WWL 事業として，まったく新しい価値創造が求められる一方で，遺産の継承も責務である。教員数 22 名で学校を運営し，一任制で展開している科目も多い現状で，更なる研究開発を強いれば，授業を圧迫し，生徒の不利益になりかねず，また，各教科科目が 5 年間取り組んだ教科 SGH 化が過去の遺物と化してしまう可能性も高かった。教科のカリキュラムに負担をかけずに，研究成果を実践し，また，新たに先進的な取り組みを実験する機会の必要性が高まっていた。時を同じくして，総合的な探究の時間において，アカデミックな個人研究カリキュラムが始まり，生徒の専門性が高まる一方で，研究対象の分野以外に対する知識の乏しさを懸念する声も高まった。

こうした背景を受けて，専門研究を推し進める一方で押さえるべきスキルやコンピテンシー，マインドセットを教授し，教科の枠を超えて，各教員の強みを生かすことのできる授業として「国際教養 基礎」が設定された。

探究的な学びには，「実践」と「理論」の往還が必要だと考え，「国際教養 基礎」では生徒が「体験的」に理論を学ぶことを目標としている。ここでの「理論的アプローチ」とは，探究活動を深めていくための研究手法（スキル）や，習得したスキルを必要に応じて選択し用いるために必要な資質・能力（コンピテンシー），課題に対して当事者意識を持つなどの意識改革（マインドセット）のことを指している。「国際教養 基礎」で培った資質・能力（コンピテンシー）は「総合的な探究の時間」だけでなく，各教科科目，学校行事，校外活動など，様々な場面で発揮され，「理論」と「実践」の融合がスパイラル的に展開されていくことを期待している。

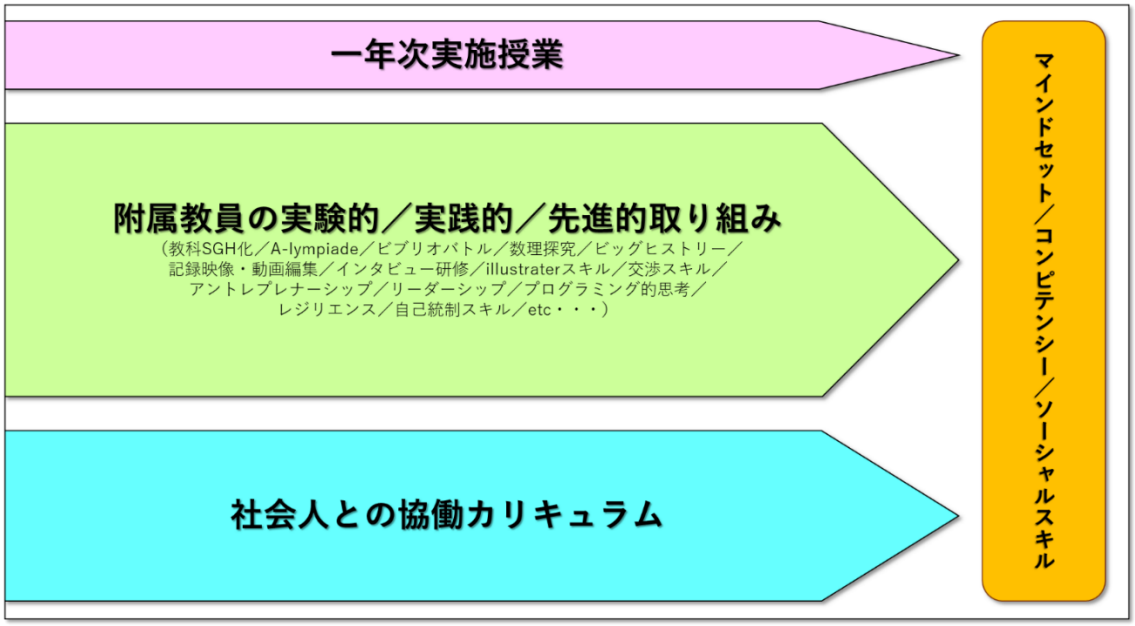
(2) 年間スケジュール

実施日	授業タイトル	授業者	目的
4/19 4/26	理想の運動会	A 塚田 B 宮崎 C 真木	カリキュラムマネジメントスキル ポスター発表スキル
6/7	NASA ゲーム	A 塚田 B 宮崎 C 真木	協働マネジメントスキル
7/?	恋のフィールドワーク	A 室谷 B 塚田 C 真木	フィールドワークスキル
9/20	factfulness	A 塚田 B 宮崎 C 真木	マインドセット クリティカルシンキング
10/11	パワーポイント研修	外山	パワーポイント作成スキル
1/10	よりよいプレゼンテーションとは	真木 塚田	発表スキル
1/17	アナ雪を科学する	真木	リサーチスキル リフレクション
1/24	理想のポスター	A 室谷 B 赤松 C 真木	ポスター作製スキル
1/31	如月祭×礼状	A 北野 B 宮崎 C 真木	リフレクション マネジメントスキル
2/14	風がふけば誰が儲かる？	真木	ロジカルシンキング vs クリティカルシンキング
2/22	factfulness 2（研究大会）	塚田	マインドセット クリティカルシンキング

（3）成果と課題

本年度はカリキュラム開発と実践を並行して行った。当初は 17 回の開講を計画していたが，総合的な学習の時間「地域活性化プロジェクト」との兼ね合いもあり，11 回の実施にとどまった。生徒に必要なスキル，コンピテンシー，マインドセットを見極め，必要に応じて開講できたのは，今年の最も大きな成果だった。しかし，ややもすると一貫性に欠けるようにも見えるカリキュラムとなった。

来年度以降は，継続してカリキュラム開発を行い，総合的な学習の時間との親和性がより高まるよう工夫していく。具体的には，まず令和元年度実施した授業を精査し，より効果的な時期に開講できるよう見直していく。また，2020 年から社会人との授業づくりを始めており，実社会で求められているスキルを陶冶できるカリキュラム開発も進めていく。来年度以降は，①「令和元年度実施した授業の改善」②「金大附属高校教員による実践的／先進的取り組み」③「社会人との協働授業」の３本柱でカリキュラム開発を行っていく。



●石川県立金沢泉丘高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取組について
・学校設定科目「SG 思考基礎」におけるグローバル課題の探究
文理融合を掲げて，公民と理科の教員がティームティーチングにより，社会課題を題材に生徒に考察させる授業を実施。２学期には，SDGs の中からテーマを取り上げ，対立する立場から議論，合意形成させる内容で，グローバル課題について深く学ぶ機会をもたせた。また，３学期には，海洋プラスチックごみ等いくつかのテーマについて，社会科学，自然科学の視点や手法を活用した授業を実践した。

・「総合的な探究（学習）の時間」における課題研究
１年の課題研究では，ローカル課題についてその原因と考えられる問題について調査・考察，２年・３年普通コースの課題研究においては，ローカル課題についてその解決方法について調査・提案をさせた。また，２年・３年 SG コースの課題研究では，グローバル課題の解決に向けた調査・提案を行わせている。いずれも，SDGs と紐つけながら実施している。
また,SG コースでは課題研究の一環として,様々な取組を実施しているが,課題研究自体が SDGs と紐つけられているため，それに関連するいずれの取組もそれを深めるものとなっている。例えば，３月に実施した関東フィールドワークでは，国連大学や JICA・プランインターナショナル等にて SDGs について学びを深める機会となっている。また，海外研修も課題研究の一環としているため，実践的な英語力の養成，グローバルマインドの獲得と並び，SDGs を軸とした課題研究の多面的な視点からの考察という目的をもっている。例えば，持続可能な生活を目指すエコビレッジ・イサカにおける体験や意見交換は研究を進める生徒にとって重要な学びとして機能している。

② 先導的なカリキュラム開発について
・高大接続
金沢大学からの留学生や大学院生の派遣を行うことで，高校生の研究を深めた。同様に，京都大学大学院や東京外国語大学からも大学院生，留学生に研究の助言等のサポートをした

・学校を超えた学びの交流の促進
「４校合同課題研究発表会」では金沢大学附属高等学校，金沢二水高等学校，金沢西高等学校とともに課題研究を相互に発表・参観することを通して，視野を広げ，研究を深めた。
また，県内の指定５校による「NSH（いしかわニュースーパーハイスクール）課題研究発表会」においても,課題研究の発表を通して学びを深めることができたとともに,SGH として研究開発を進めてきたモデルを県内教育関係者に波及する役割ともなった。
本来は「探究甲子園」においても本校代表２チームが他校とともに発表する予定であったが，新型コロナウィルスの影響で中止となってしまった。また，金沢大学附属高等学校と準備を進めてきた「北信越探究フォーラム」も，北信越 11 校の生徒による新しい探究モデルの実践を目指してきたが，同様に中止となってしまったことが，大変残念である。

・実践的な英語力の養成
学校設定科目「グローバル・イングリッシュ」等を通して，実践的でコミュニカティブな英語の授業に取り組んでいる。題材もグローバル課題を扱うことで，より社会課題への意識を高める役割も担っている。
また，1 年次には金沢大学から留学生を派遣していただくことで，全員にワークショップ形式で英語を活用して交流を行う経験を保障している。

・グローバル・リーダー養成講座の開催
学校全体の希望者を対象に，様々な特別講義やワークショップを実施することで，グローバル・リーダーを志す生徒を増やす働きかけを行っている。令和元年度は，「グローバル×医学部」「YU セミナー」「京都大学出前講座」などの事業を企画。また，海外留学や研修に挑戦した生徒

が，その体験や気づきを共有する「グローバル体験報告会」は，年々海外留学に挑戦する生徒が増加しているという効果をもたらしている。

・ジェネリックスキルの測定とふりかえりによるメタ認知の向上

生徒全員に対して探究的学習の成果を測ることも視野に入れて，ジェネリックスキルの外部アセスメントを導入している。その結果は，生徒アンケートによる自己評価とも合わせて分析することで，メタ認知の精度について検証する材料としている。

また，効果的な振り返りのあり方やポートフォリオの構築についても実験的に取り組んでいる。

●石川県立金沢二水高等学校における取組

①　SDGs を題材とした特色ある取り組みについて

(1)模擬裁判実習　２年生人文科学コース（４０名）生徒対象

総合的な学習の時間に行う課題探究活動の一端として，４月から６月上旬まで１０時間をかけて，金沢弁護士会の弁護士より指導を受けながら学ぶ。「平和と公正をすべての人に」の目標達成のため，裁判に関わる基礎知識を学ぶとともに，実習を通して公正さとは何かを考察する機会とする。複数の弁護士を学校に招いての学習と，金沢大学の法廷教室に出向いての実習授業を行う。

＜ねらい＞

・資料を読み込み，証人と被告双方の主張とその根拠となる証拠を収集する。双方の立場での主張の整合性と問題点を分析する。　【課題の設定】【情報の収集】

・論告と弁論をまとめ上げるため，多くの事実を整理分析しながら自分の考えをまとめ，信用性の高い発表を作り上げていく。　【整理分析】【まとめ】

・実際の法廷の場で，相手に伝わるように工夫しながら表現する力を身につける。【表現】

＜日時と内容＞

第１・２時	４月１８日（木）	・刑事裁判の基本原則と法曹三者の役割を学ぶ ・三角ロジックを学ぶ ・刑事裁判手続きの流れの概説 ・模擬裁判選手権の教材の読解
第３・４時	４月２５日（木）	・ブレインストーミング：積極事実消極事実の抽出 供述の信用性の検討 ・論告と弁論の検討①
第５・６時	５月　９日（木）	・論告と弁論の検討②③
第７～10 時	６月　６日（木）	模擬裁判実演実習　金沢大学法廷教室にて

＜学習効果＞

・刑事裁判に関して弁護士から直接学ぶ機会の貴重さを実感できた。

・裁判を模した教材を利用して，読解力と分析力，発表の構成力を学ぶことができた。

・大学の法廷教室で模擬裁判を実演することで，知識と理解を実践的に活用する機会を得た。視野を広め経験を積むことができた。

(2)グローバルソリューション　２年生人文科学コース（４０名）生徒対象

課題探究活動を行う総合的な学習の時間を「グローバルソリューション」という科目名とし，SDGs に掲げられた目標の解決に資する課題の設定や考察を行う。ただし，規模の大きすぎるテーマでは高校生の力での解決は困難なことから，学校生活や地域社会の中で取り組める課題を取り上げるようにしている。

令和元年度は，「身近な生活の中で高校生としてできる食品ロス削減への取り組み」，「加賀水引を地元高校生に広める取り組み」，「金沢らしい土産を新しく作り出すには」といったテーマに取り組む班があった。「産業と技術革新の基盤をつくろう」「住み続けられるまちづくりを」「つくる責任つかう責任」等の目標につながる考察を深めた。

(3) グローバルゼミ　２年生人文科学コース（４０名）生徒対象

上記グローバルソリューションの一環として，１１月６日（水）午後，金沢大学に学ぶ留学生１０名と日本人支援学生８名を迎え，課題探究で取り組むテーマについて意見交換をしながら，交流と考察を深める機会を持った。講義科目「日本の教育」の受講学生の派遣を，国際機構の斉木麻利子教授に依頼して例年実施している行事である。本校生徒は，修学旅行先は海外であるが，課題探究活動を深めるための研修の時間を設けることができないため，自校に留学生を招いての交流と研修の機会としている。

大学生，そして外国人としての視点から多くの意見と助言をもらうことで，視野が広がり，テーマに対して複眼的な見方が出来るようになる。

●石川県立小松高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取組について
９月２５日～２７日に実施された関東ヒューマンセミナーに参加し，JICA 地球ひろば職員やケニアで活動していた青年海外協力隊の方のお話を伺った後，地球で起こっているごみ問題を学んだ。

② 先導的なカリキュラム開発について

【カリキュラム開発について】
本学では，これまで課題研究を中心に据えた全校での３年間の学習体系の研究開発を行い，１年次においては，「総合科学」・「課題探究Ⅰ」（理数科）及び「探究基礎」（普通科）を探究型の学校設定科目とし，「プレゼンテーション&ディスカッション」を英語による発表・討論のための学校設定科目として設定した。２年次には１年次での学びを基盤に，課題研究を実施するため，「課題探究Ⅱ」（理数科），「課題探究」（普通科文系・理系），「人文科学課題研究Ⅰ」を設定している。さらに第３学年においては科目融合・領域融合型の探究学習の研究開発を行い，「課題探究Ⅲ」（理数科），「科学探究」（普通科文系・理系），「人文科学課題研究Ⅱ」を設定した。
各科目を通じ，１年次には科学的見方・基礎的知識，論理的思考力，探究活動に必要な技能，グローバルな国際社会で活用できる言語能力を醸成している。２年次には，科学的探究力，自己表現力，知識を活用した課題解決能力，主体的学習態度，情報化・グローバル化した国際社会において多元的な視点で物事を考える思考力と探究力を醸成している。３年次にはコミュニケーション能力や科学的探究力，問題解決力を醸成している

【大学等との連携について】
こまつ研究サポートプログラム
金沢大学・JAIST・金沢工業大学・石川県立大学等の高等教育機関や小松製作所等の企業と連携し，課題研究に対する大学・企業からの指導助言をうけるための支援体制を整備。令和元年度は「課題研究Ⅱ」の中間報告会に金沢大学や JAIST 等から教員が参加した。

【海外の高校等との連携について】
○第 2 学年理数科
・大学実験セミナー及び英語発表
令和元年度初めて石川県立大学と共同企画し，大学教員の指導の下で食品微生物に関する実験を行った。科学交流のため来校していた韓国大田科学高校の生徒を交えたグループ活動を行い，ALT，及び日本人国語教員指導の下，英語で発表した。セミナー全体の説明も英語で行われ，生徒はグループ内や宿舎でも英語によるコミュニケーションを行った

・韓国大田科学高校との科学交流（7 月～12 月）
英語での発表や意見交換を通じて，英語の表現力と研究能力を高める。
韓国大田科学高校生徒が来校し，共同研究と合宿を行った。（7 月）
小松高校の生徒が韓国を訪問し，科学交流・研究発表を行った。（12 月）
韓国先端科学技術大学，韓国電子通信研究院を見学した。（12 月）

○第 2 学年人文科学コース 2 年
・台湾での研修と交流・研究発表（12 月・希望者）
台湾との交流は令和元年度で 7 回目となり，相互に訪問しあい，交流を深めている。
國立新營高級中學での交流（課題研究発表・文化交流等）
日系企業研修（日勝生加賀屋，徳光重人氏講演）

●石川県立七尾高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取組について
・「Ｂ探究Ⅰ」に係る講演会Ⅱ
①参加生徒　１１H生徒　４０名
②目指すべき姿・つけたい力
SDGs の意義と本質を知ると同時に，次年度に SDGs の視点から探究活動を進めるための基礎を学ぶ。
③日時内容
日時：1月１７日（金）１３：１５～１５：０５
講師：清水　義彦　氏　（富山県立大学工学部　准教授）
内容：2030SDGs 公認ファシリテーターを講師に招き，国連が定める SDGs（持続可能な開発目標）についての講演やカードを使用したワークショップを体験する。
生徒の変容について以下の項目でアンケートを行った結果，両項目ともポジティブな選択肢で１００％を達成しており，生徒の SDGs への理解の深まったと判断できる。

アンケート項目
Ｑ１．SDGs の目的や意義について理解できた。
Ｑ２．紹介された事例などを通して能登の可能性を感じることができた。

② 先導的なカリキュラム開発について
・海外研修
①参加生徒　２１H生徒　３７名
②目指すべき姿・つけたい力
・英語発祥の地イギリスでの体験的・実践的研修を通して，本校１・２年次で学習し，身につけた英語活用能力・英語コミュニケーション能力を向上させる。
・異文化交流体験を通して，他者を尊重し，かつ積極的に自分の考えや主張を伝えようとする態度を養う。併せて，礼儀やマナーの意義について考えさせ，国際社会で活躍できる真のリーダーとしての資質を育成する。
・イギリスの伝統的な側面と，多民族国家としての側面を体験することによって，他国の歴史や文化・習慣を尊重する態度を養うとともに，国際的・多角的な視点に立って我が国を捉える豊かな知性・感性を涵養する。
・研修全体を通し，里山里海に代表される能登の風土や伝統文化・工芸を現地で紹介し，ふるさとの魅力を発信する機会とする。さらに現地の観光政策についてフィールドワークを実施し，能登の観光政策に活かす方策を探究する。
③日時内容

日数	月/日	スケジュール
1	9 月 30 日（月）	金沢大学での留学生とセッション 空路ドバイに向けて出発 （機内泊）
2	10 月 1 日（火）	飛行機乗り換え 空路ガトウィック空港に向けて出発 ロンドン着 UCL 紅林氏による講義　（ホテル泊）
3	10 月 2 日（水）	ロンドン市内研修（大英博物館等を訪問し歴史的知見を深める） ホストファミリーの家へ　（ホームステイ）

4	10月3日 （木）	オックスフォード研修（オックスフォード大学生に対して地域資源を活かしたビジネスプランのプレゼンテーション及びディスカッションに取り組む）（ホームステイ）
5	10月4日 （金）	ストラットフォード・ウォーリック研修（地域資源「シェイクスピアの生誕地」を活かした活性化の参考として，また英文学の基礎的知識を学ぶために訪問する）（ホームステイ）
6	10月5日 （土）	終日ホストファミリーと過ごす（ホームステイ）
7	10月6日 （日）	専用バスにて空港へ 空路ドバイに向けて出発（機内泊）
8	10月7日 （月）	空路日本に向けて出発 七尾高校到着後，解散

生徒の変容について，以下の項目でアンケートを行った結果，全ての項目でポジティブな選択肢が８０％以上となっており，他文化への理解や課題研究に対する理解を深め，多角的な思考，積極性等を獲得し，自身の生活・将来に対する考え方に変化があったと判断できる。

アンケート項目
Ｑ１．ホームステイを通じて，ホストファミリーと十分な意思の疎通を図ることができましたか。
Ｑ２．事前学習やホームステイを通じて，イギリスの文化について理解を深めることができましたか。
Ｑ３．オックスフォード大学訪問を通じて，海外で学ぶ意欲が高まりましたか。
Ｑ４．オックスフォード大学での発表・討論・質疑で課題研究を深めることができましたか。
Ｑ５．課題研究（ﾋﾞｼﾞﾈｽﾌﾟﾗﾝ）を通して，能登の可能性について理解を深めることができましたか。
Ｑ６．課題研究（ﾋﾞｼﾞﾈｽﾌﾟﾗﾝ）を通して，多角的に考える姿勢が身に付きましたか。
Ｑ７．海外研修を通して，英語を積極的に話そうとする意欲や積極性が身につきましたか。
Ｑ８．海外研修を通して，日本と世界の違いの理解を深めることができましたか。
Ｑ９．今回の研修を通じて，自分のこれからの生活や将来に対する考え方に変化はありましたか。

●富山県立高岡高等学校における取組

① SDGs を題材とした特色ある取組について

本校２年生では 2 学期の「総合的な学習の時間」（2 単位）を使って「SDGs について理解を深め，そこで得た知識を使い，自分たちの身近にある様々な問題や課題に目を向け，解決策を提案してみよう」という活動を行った。以下に実施計画を示す。

時　期	項　目	備　考
１年３学期	「身近にある問題に目を向けよう」	８つの講座を設定し，生徒が１つ選んで聴く。
２年８月	「SDGs について知ろう」 二つの講演会を企画した。	・富山県立大学工学部准教授の清水義彦先生から，SDGs について学び，カードゲームを行う。 ・金沢大学先端科学・社会共創推進機構能登里山里海 SDGs 研究部門特任助教の北村健二先生から，SDGs が実際に自分たちの生活にどのように関連しているかについての講演をしていただく。
２年夏課題	夏季休業中に SDGs に関わる新聞記事についてのレポートを課した。	記事をもとに参考に班決めを行う。
２学期	全体ガイダンス，班決め，研究課題設定報告会を経て校内研究発表会を行う。	9 月 25 日課題設定報告会 12 月 6 日校内課題研究発表会 個人レポート提出

この活動の目的は，「複雑で先行きの不透明なこれからの時代を担うための『真の学力』を身につけよう」であった。ここでの『真の学力』とは，探究力（幅広い視野での関心・知識，情報を収集・選択・活用する力，課題解決のための思考力・判断力）と豊かな人間性（自ら行動する主体性・積極性，協働性・コミュニケーション能力，意見を人に伝える情報発信力）を意味する。これらを磨くために一つの手段として「SDGs」をテーマとした課題研究に取り組んだ。最初は「SDGs」という言葉の意味も知らなかった生徒もいたが，関連する講演を聴き，自分たちで実際に新聞記事などを読んで理解を深めていった。調査研究はグループ活動が中心で，文献研究や情報収集が主な手段ではあったが，中にはインタビューやアンケートなどを行うグループもあり，情報を収集・選択・活用する力がついたのではないかと思われる。また，情報発信力をつけ，全国高校生フォーラム（東京）にポスター発表で参加した班もあった。生徒の振り返りでは，自分自身の研究についての反省点・改善点に言及しているものや，次年度へ向けての提案や今後の学習に生かしていきたいという意見も多かった。

②先導的なカリキュラム開発

2 年人文社会科学科，理数科学科の総合的な学習の時間，課題研究の時間では，平成 27 年度から，海洋環境問題をテーマとする研究班ができ，その活動，研究成果の継承が令和元年度まで続いている。また，2 年普通科においても令和元年度から総合的な学習の時間に SDGs をもとにした課題研究への取り組みが始まり，21 名の生徒が海洋環境問題について研究している。調査結果等は校内，県内他校との交流会で発表し，啓発活動につなげている。

●福井県立高志高等学校における取組

①　SDGs を題材とした特色ある取組について
・課題研究・海外・国内フィールドワークについて
　「ＫｏＡ－Ｓ（グローバル）」（課題研究に関する学校設定科目）での課題研究に資することをねらいとして実施した。本校２年生グローバル選択生徒８０名は，「世界に発信!!　高志高生がつくるコラボ商品」をテーマに県内企業とコラボレーションをして福井をアピールする商品開発を行う課題研究に取り組んでおり，これは，SDGs の目標８（「働きがいも経済成長も」）に該当する。
　生徒たちは海外・国内の計４コースから１つを選び参加する。それぞれの実施状況の概略を以下に報告する。
ア．タイ研修（令和元年１０月２０日（日）～１０月２７日（日））
　　・カセサート大学訪問研修　　・企業研修（福井銀行バンコク事務所職員による講演）
　　・カセサート大学附属マルチリンガルプログラム校訪問研修（ホームステイ含め４日間）
イ．ベトナム研修（令和元年１０月２０日（日）～１０月２７日（日））
　　・マリ・キュリー高校訪問研修　　・ホーチミン市師範大学訪問研修
　　・ドンズー日本語学校ビンミー留学センター訪問研修
　　・日系企業研修（DAIM VIETNAM CO.,LTD　Pizza 4P’s　AEON VIETNAM CO., LTD.）
　　・歴史文化研修（統一会堂・戦争証跡博物館訪問　ホームビジット体験）
ウ．オーストラリア研修（令和元年１０月１９日（土）～１０月２７日（日））
　　・スインバン大学訪問研修（ホームステイ含む）　・マウントウェイブレイ校訪問研修
　　・歴史文化研修（メルボルン博物館・ヒールズビル自然保護区・メルボルン市内）
エ．東京研修（令和元年１０月２１日（月）～１０月２５日（金））
　　・筑波大学附属坂戸高校訪問研修　　・大学訪問研修（東京外国語大学・立教大学）
　　・TOKYO GLOBAL GATEWAY 訪問研修
　　・企業等訪問研修（外務省・福井県東京事務所・リンカーズ株式会社）

※本校はＳＳＨ指定校であり，サイエンス関係の課題研究においても，SDGs に関連した課題研究に取り組んでいる生徒がいる。
　また，アメリカ東海岸・アメリカ西海岸・マレーシア・シンガポール・国内の計５コースから１つを選び，上記ア～エのような研修を行っている。

・大学・企業・団体との連携
ア．福井大学地域創生推進本部・福井経済同友会等との連携
　上記機関からは平成２７年度から課題研究に関する指導・助言等を頂いており，専門的な見地からオリエンテーションや仮説の設定，中間報告会，最終報告会など様々な面で指導・助言を頂いた。特に福井大学地域創生推進本部の竹本拓治教授には，企画段階から様々な助言を頂いており，本校の課題研究をスムーズに行うことができている。また，福井経済同友会からは１年生における外部講師連携授業において，講師を紹介して頂いており，これまでに延べ６社（日華化学株式会社・第一ビニール株式会社など）に連携授業を実施している。

②　①以外の先導的なカリキュラム開発について
・海外の高校等との交流について
　本校は，平成２７年度よりカセサート大学附属マルチリンガルプログラム校と交流協定を結んでおり，令和元年度は令和元年１２月１６日（月）～２０日（金）の日程で本校を訪問した。本校滞在中は課題研究に関するプレゼンテーション，授業参加，部活動体験，歴史文化体験等を行った。

・英語における学校設定科目の設置について
　「KoA-S」における探究学習を英語運用面から支援するための科目として，以下のとおり学校設

定科目を実施した。

記号	科　目　名	単　位　数					備　考
		１年	２年文系	２年理系	３年文系	３年理系	
ア	英語活用ＢＥ(Basic Expression)	３					
イ	英語活用ＡＥ(Advanced Expression)		３	２			AE・RP・DD より１科目選択
ウ	英語活用ＲＰ(Research & Presentation)		３	２			
エ	英語活用ＤＤ(Debate & Discussion)		３	２			
オ	英語理解ＴＷ(Today’s World)				１	１	TW・CW より１科目選択
カ	英語理解ＣＷ(Change the World)				１	１	

第１学年では，ア「英語活用ＢＥ」を開設し，基礎的な表現力の定着に焦点を当て，実践的な状況設定のもとで様々な形態による表現活動を繰り返し行う。

第２学年ではイ「英語活用ＡＥ」，ウ「英語活用ＲＰ」，エ「英語活用ＤＤ」を選択科目として開設している。イはアの発展科目であり，情報や意見をより確実に伝達するための適切で正確な表現や，説得力のある論理展開などを習得させることを目標とする。ウでは，生徒はまず提示された素材を読んだり聞いたりし，その後，関連する事柄について個人またはグループで数時間かけて調査しながら，ポスターやスライドなど簡単な視覚資料にまとめる。また，プレゼンテーションを行いクラス全体でシェアリングする。エでは関連する事柄についてペアやグループで意見交換したり，ディベートしたりする活動に多くの時間を充てる。ウ・エはともに社会の諸事情や世界の諸問題に関する事実情報や意見・考えなどを多角的に考察し，論理の展開や適切な表現方法を工夫しながら議論・討論する能力を養うことをねらいとしている。

次年度，第３学年ではオ「英語理解ＴＷ」，カ「英語理解ＣＷ」の開設を予定している。オでは英字新聞やオンラインニュース，ネット上の手記などのオーセンティックな素材を積極的に活用しながら，時事英語を読み解いたり，最新の情報を的確に収集したりする力の育成を目指す。カでも同様に時事的なトピックを扱うが，ディスカッションやプレゼンテーションを通して様々な意見や考えに触れることで，そのトピックについての考察を深めながら，最後にはまとまった文章で解決や改善に向けた方法を提案することをねらいとしている。